

肝（胆）の病証と治療

神奈川県・平馬医院 平馬直樹

1. 肝の生理機能

肝の生理機能を表1に示す。肝は五行では木に配当され、樹木が天に向かってのびやかに枝を伸ばしていく性質、すなわち条達の性質をもつとされる。肝は全身の気のめぐりを調節し、感情や情緒に関わっている。また、血を貯蔵し、心と協力して血流量の調節、全身諸器官・組織に血を供給している。

表1 肝の生理機能

1) 疏泄を主る

2) 血を蔵す

1)の「疏泄を主る」の疏泄は疏通、発泄の意で、全身の気機（気の昇降出入運動）を疏通する。また、「土得木而達（土は木のサポートを得ることによって、機能を達成することができる）」という言葉が示すように肝（木）は脾胃（土）の運化・受納機能を促進する。肝気の乱れは脾胃の機能に影響を及ぼしやすい。また精神情緒の調整を担当している。疏泄機能が失調すると抑鬱・興奮・怒りなどの感情、情緒の乱れが生ずる。

2)の「血を蔵す」は血の貯蔵を担当することを指し、全身に血を運行する心の働きと協調して、全身の血流量の調節と組織器官への血の供給を主っている。また、奇経八脈のうちの任脈、衝脈を支配し、女性の月経、妊娠に関係する。そのため、「肝は女子の先天」といわれている。また、出血傾向にも関与し、肝不蔵血という病証による出血がみられる

2. 肝に属する組織・器官、液、情志

表2に肝に属する組織・器官、液、情志を示す。五行の木に配当される項目である。

表2 肝に属する組織・器官、液、情志

- 1) 腑にあつては胆と表裏をなす
- 2) 筋に合す
- 3) 目に開竅し、その華は爪にある
- 5) 液にあつては泪となす
- 6) 志にあつては怒となす

肝と表裏をなす腑は胆である。胆の生理機能は次項に示す。筋は運動を主る筋肉、筋膜、腱などの組織で筋に肝血が潤沢に供給されなければ、運動機能の調節失調や、筋の痙攣などが生ずる。また、目の状態、視力や結膜の充血と涙液の具合、爪の状態、色沢・固い・薄い・割れるなどが肝の機能を外から観察するポイントとなっている。感情では怒りが肝気が暴発するために起こるとされる。憂鬱、苛立ちなどの情緒の乱れも肝の状態を反映する。

3. 胆の生理機能

肝と表裏をなす胆の生理機能を表3に示す。

表3 胆の生理機能

- 1) 精汁を貯蔵・排泄する
- 2) 決断を主る

胆は「中精の腑」と称される。精汁を貯蔵・排泄する。精汁は胆汁のことと解されている。精汁は、腸胃に注いで、水穀の運化に協力するほか、神の基礎物質でもある。また、精神活動では、決断を主るとされる。決断力や心の落ち着き(肝っ玉)に関与している。六腑の多くは中空器官で、飲食物の伝化を担っているが、胆は精汁を貯蔵するという臓のような働きも備えている。そのため、六腑の一つであると同時に奇恒の腑(臓の性質ももつ奇妙な腑)にも数えられている。

4. 肝と胆の症候

肝病によくみられる症状は、疏泄、蔵血の機能の失調を反映するもので、情緒の失調、肝胆の経絡の走行部位や、肝に属する筋・目・爪・婦人科の症候となって現れる。胸脇・少腹の脹痛、精神情緒の失調（煩躁・易怒）めまい、頭痛、手足のふるえ・痙攣、眼の症状、月経の失調、月経痛などである。

胆病によくみられる症状は、胆熱は口苦を来しやすい、少陽胆経の走行部位の脇痛、胆汁の分泌異常の黄疸、決断力の低下による不安感、ビクビクしやすい、煩躁などである。

5. 肝と胆の病証

肝と胆の病証を表4にあげ、順次解説を施す。

表4 肝と胆の病証

- | | |
|----------|----------|
| 1) 肝気鬱結証 | 6) 肝風内動証 |
| 2) 肝火上炎証 | 7) 寒滯肝脈証 |
| 3) 肝血虚証 | 8) 肝胆湿熱証 |
| 4) 肝陰虚証 | 9) 胆鬱痰擾証 |
| 5) 肝陽上亢証 | |

1) 肝気鬱結証

【病態】 肝の疏泄機能が失調し、気めぐりが阻滞して、精神情緒の失調、肝経・胆経の循行部位の疼痛や脹満感が生じ、さらに血めぐりにも影響し、月経の異常などを引き起こす。また、肝気が鬱滞すれば、痰を生じやすくなる。精神的刺激や抑鬱が原因となることが多い。

【症候】 精神抑鬱、イライラ、胸悶、溜め息をつく。胸脇・少腹の脹痛、乳房の脹満感。月経痛、月経不順。頸部の腫瘤、梅核気（咽喉閉塞感）。これらの症状が、情緒の変動に応じて増強・軽減する。脈弦。

【治法】 疏肝理気解鬱

【方剂】 ①四逆散（『傷寒論』）

柴胡・芍薬・枳実・甘草

方中の柴胡は疏肝、枳実は行気消痞で、合わせて行気通滞、疏肝解鬱の効能を発揮している。柴胡は昇発の性があるのにたいして、枳実は下気降逆の作用があり、2味を配して昇降のバランスを回復する。

柴胡・枳実は燥性・動性があるため陰分を損傷しやすい。芍薬は柔肝、炙甘草は益気健脾の効能があり、芍薬の酸味と炙甘草の甘味を合わせる

と酸甘化陰の効を發揮して、陰分を補強し、柴胡・枳実による傷陰を予防する。

②逍遥散（『和剂局方』）

柴胡・芍薬・当帰・白朮・茯苓・薄荷・甘草

疏肝解鬱に健脾和營を兼ねる。柴胡に少量の薄荷を配して疏肝条達の効を高める。当帰、芍薬で養血柔肝し、白朮、茯苓、甘草は健脾し気血の化生を促す。牡丹皮、山梔子を加えると加味逍遥散となり、この2味で肝火を瀉す。肝鬱火化も伴い、イライラ、怒りっぽい、口渴なども呈するものに用いる。

2) 肝火上炎証

【病態】 肝気が鬱結すると、鬱熱を生じて化火しやすい。このような肝鬱化火が起こったり、あるいは何らかの原因で熱邪が肝経に侵入すると、火の性質は炎上、すなわち上に昇りやすいので、肝経の気火が身体の上部に昇り、頭部・眼などに火熱の症状を引き起こす。また、興奮性の精神症状を来す。

【症候】 めまい、頭痛、顔面紅潮、眼の充血、口苦口乾。煩躁易怒、不眠、いやな夢を見てうなされる。耳鳴、吐血・鼻出血、胸脇の灼熱痛、尿は黄色。舌質紅苔黄、脈弦数。

【治法】 清肝瀉火

【方剤】 ①竜胆瀉肝湯（『医方集解』）

竜胆草・黄芩・梔子・柴胡・当帰・生地黄・沢瀉・木通・車前子・甘草

肝胆の熱を清泄する力量の強い竜胆草が主薬である。黄芩・梔子がこれを助け、沢瀉・木通・車前子は清熱利湿通淋する。柴胡は肝経への引経薬。苦寒の薬が多いので、陰血を損耗しないように地黄・当帰を配する。

②柴胡加竜骨牡蛎湯（『傷寒論』）

柴胡・黄芩・人參・半夏・桂枝・茯苓・大棗・生姜・大黃・竜骨・牡蛎・鉛丹

小柴胡湯から甘草を除き、桂枝・茯苓・大黃・竜骨・牡蛎・鉛丹を加えた組成で、和解肝胆、潜陽熄風の効能がある。少陽と厥陰（肝・心包）の気機が阻滞して、鬱した肝火が心に上擾し、意識障害や興奮性の精神症状が現れる。少陽病の気火交鬱証に用いられる。

3) 肝血虚証

【病態】 血虚証は、失血による血液の損失、脾虚により血液の化生不足、情志内傷による心血の損耗などによって起こる。血の不足により血脈は空虚となり、血の全身への滋潤栄養作用が失調する。また、精神思惟活動も安寧を失う。全身の血虚は、肝の蔵血機能の失調を来しやすい。全身の血虚の所見に加えて、肝血が潤養している眼・爪・筋などがその潤いと栄養を失い、月経の失調を来しやすい。

【症候】 めまい、耳鳴、顔面は蒼白で艶がない、眼がかすむ、爪が固くカサカサになりあるいは変形する。手足が痺れたり知覚鈍麻を来し、筋肉がピクピク

痙攣する。月経は出血量が少なく色が淡い、希発月経や閉経となることもある。舌質淡苔白，脈弦細。

[治法] 滋補肝血

[方剤] 四物湯（『和剤局方』）

熟地黄・当帰・白芍・川芎

方中の熟地黄は甘微温で、滋陰補血の効にすぐれ、主薬である。当帰は辛甘温で補血養肝，和血調經の働きにすぐれ、臣薬である。白芍薬は酸苦微寒で、養血柔肝の効があり，川芎は辛温で活血理氣の効がある。いずれも血分に作用する薬であり，熟地黄の補に，川芎の散を配し，川芎の発散に芍薬の収斂を配したバランスにすぐれた配合となっている。

（付方）補肝湯（『医宗金鑑』）

熟地黄・当帰・白芍・川芎・酸棗仁・木瓜・麦門冬・甘草

四物湯がベースの組成。麦門冬は養陰潤燥，熟地黄を助け，腎精を補益し養血を促す（精血同源，肝腎同源）。酸棗仁は補肝養心で，虚煩不眠に対応。木瓜は平肝舒筋，芍薬を補助し，筋肉を養う。肝血と肝陰を養う効能にすぐれる。

4) 肝陰虚証

[病態] 肝は元來陰分が不足し，相対的に陽氣が余りやすい臓である。精神情緒の失調は，肝陰の消耗を来しやすい。また，五行学説によれば腎と肝とは母子関係にあり，腎の陰虚は肝の陰虚をも引き起こしやすい。全身の陰虚の症候（乾燥と内熱）に加えて，頭目，筋などを肝陰が滋潤できなくなるための症候が現れる。

[症候] 頭がクラクラする，耳鳴，眼が乾いて渋る，手足のふるえ。手掌・足底のほてり感，盗汗，口乾。舌質紅苔少，脈弦細数。

[治法] 滋陰柔肝

[方剤] 杞菊地黄丸（『医級』）

熟地黄・山茱萸・山薬・沢瀉・牡丹皮・茯苓・枸杞子・菊花

六味地黄丸に枸杞子と菊花を加えたもの。枸杞子は養肝陰，菊花は清肝明目。六味地黄丸の証に加えて，肝陽上亢による頭痛，眩暈，目のかすみ・充血などに用いる。また，広く肝腎陰虚証に応用される。

5) 肝陽上亢証

[病態] この証は，肝陰虚証を基礎としている。肝の陰分が不足すると，相対的に肝の陽氣が余り，肝陰は肝陽を制御できなくなる。人体の陽氣は，臟腑から溢れ出ると，上へ昇る性質をもっている。この証の病態は，前項の肝陰虚に加えて，肝陽の上亢を伴ったものである。

[症候] めまい，耳鳴，頭や眼の奥が脹るように痛い，顔面紅潮，煩躁易怒。動悸，健忘，不眠，夢が多い。腰や膝が重くだるい，頭が重く足がふらつく。他に肝陰虚の症候をしばしば伴う。舌質紅，脈弦有力または弦細数。

[治法] 滋陰平肝潜陽

[方剤] 天麻釣藤飲（『雑病証治新義』）

天麻・釣藤・石決明・梔子・黄芩・牛膝・杜仲・益母草・桑寄生・夜交藤・茯神

天麻と釣藤は平肝熄風の効があり、肝風を収める主薬である。梔子と黄芩は、清熱瀉肝、石決明は平肝潜陽明目で、天麻・釣藤を補助している。杜仲・桑寄生は補益肝腎。益母草と牛膝は血分の熱をめぐらせ下ろす。夜交藤と茯神は、安神定志で、興奮症状を抑える。

6) 肝風内動証

[病態] 肝は五行では「木」に属すが、風もまた木に属す。内風の発生は、肝の失調に起因することが多い。肝陰虚、肝血虚、あるいは肝熱などの病態から発展して内風を生ずると、痙攣や振戦などの「動揺」（風が木の梢を揺する様）を特徴とする症候が現れる。

- [症候]**
- ①肝陽化風：めまいがひどく立ち上がれない、頭痛、頸がこわばり手足がふるえるなどの髄膜刺激症状を主とする場合と、意識障害、半身不遂、構音障害などの脳血管障害を主症状とする場合がある。いずれにしても急性期の症候である。
 - ②熱極生風：感染症（外感病）などの際に、熱邪が亢盛となり肝風を引動したもので、高熱、意識昏迷、手足の痙攣、頸部の強ばり、両目上視、牙関緊閉。舌質紅または絳、脈弦数。
 - ③陰虚動風：温熱の邪による感染症で、病状が長引き、陰液を損耗することによって発生する。肝陰虚証の症候に、痙攣などの動風の症候が加わったもの。
 - ④血虚生風：血虚によって筋脈が、血の栄養と滋潤を失ってふるえなどの動風の症状を引き起こした。肝血虚の症候に動風の症候を伴うものと考えればよい。

[治法] 潜陽熄風

[方剤] ①三甲復脈湯（『温病条弁』）

炙甘草・生地黄・白芍・麦門冬・阿膠・牡蛎・龜板・鼈甲

陰虚動風の比較的重症に用いる。滋陰潜陽、熄風安神之効がある。炙甘草湯（『傷寒論』）を、温病の肝腎傷陰、虚熱内盛証に用いるために改変した加減復脈湯に、牡蛎・鼈甲・龜板（この3味を三甲と称する）を加えた組成である。炙甘草・生地黄・白芍は原典では六錢（約18g）と多めに用いる。益気生津の炙甘草の甘温に補血斂陰の白芍の酸渋を配すると酸甘化陰の組み合わせとなり陰液を滋補する。生地黄・麦門冬・阿膠は滋陰補血し、生地黄・麦門冬・白芍は虚熱を清する。陽亢動風を鎮める牡蛎・鼈甲・龜板は滋陰潜陽、鎮心安神に働く。

②当帰飲子（『濟生方』）

当帰・芍薬・地黄・川芎・何首烏・蒺藜子・荆芥・防風・黄耆・甘草

血虚生風の痒みに用いる。血虚により、血の寧静作用と、気を制御する働きが低下すると。体内に風を生じやすくなる。風がふるえを起こせばパーキンソン症状などを来す。本方は、風が生じて痒みを生じたものに用いる。老人性皮膚癢痒症などによく効く。

四物湯の養血に黄耆・何首烏で益気養血を強化，痰藜子・荆芥・防風で祛風止痒の配合，養血潤燥，祛風止痒の効にすぐれる。

7) 寒滯肝脈証

[病態] 肝は，その疏泄機能と蔵血機能とによって気血めぐりに密接に関与している。この証は肝経に寒邪が侵犯し，気血の凝滯を引き起こしたものである。

[症候] 四肢の厥冷，少腹の疝痛，辜丸墜脹疼痛（鼠径ヘルニア），チアノーゼ。舌質紫暗苔白滑，脈沈弦遅。

[治法] 暖肝散寒

[方劑] ①暖肝煎（『景岳全書』）

当帰・枸杞子・茴香・肉桂・烏薬・沈香・茯苓

当帰は温養肝血，枸杞子は滋補肝腎，合わせて温養肝腎精血，本方の中核である。肉桂を配して温腎助陽・散寒止痛，茴香も温腎散寒，烏薬・沈香は温腎行気止痛，さらに健脾の茯苓を加えて中焦を調えている。

②当帰四逆加呉茱萸生姜湯（『傷寒論』）

当帰・桂枝・芍薬・細辛・通草・大棗・炙甘草・呉茱萸・生姜

温経散寒，養血通脈の方。当帰と芍薬は温養肝血，桂枝と細辛，通草は経脈を温通。大棗・炙甘草は健脾和中，呉茱萸と生姜で暖肝，温中降逆。

8) 肝胆湿熱証

[病態] 湿熱の邪は，一般に脾胃を侵しやすいが，肝胆の経絡に侵犯することも希ではない。湿熱蘊脾の証をベースとしていることが多く，そのうえに肝気鬱結と肝胆の経絡を湿熱の邪が阻塞した症候が加わる。

[症候] 胸脇脹痛灼熱，食欲不振，腹脹満，口苦悪心。頻尿，尿色赤黄。舌質紅苔黄膩，脈弦数。黄疸，陰囊の湿疹，外陰瘙痒，帯下黄臭などを主症状とすることがある。

[治法] 疏肝清熱，利湿解毒

[方劑] 竜胆瀉肝湯（『医方集解』）

竜胆草・黄芩・梔子・柴胡・当帰・生地黄・沢瀉・木通・車前子・甘草

肝胆の熱を清泄する力量の強い竜胆草が主薬である。黄芩・梔子がこれを助け，沢瀉・木通・車前子は清熱利湿通淋する。柴胡は肝経への引経薬。苦寒の薬が多いので，陰血を損耗しないように地黄・当帰を配する。

9) 胆鬱痰擾証

[病態] 精神情緒の失調などで，胆気が鬱滯し，胆経に鬱熱と痰を生じ，心神をかき乱して以下の精神症状を生ずる。胆熱の症候と胆気不泄のため，脾胃の消化活動に影響し，胃腸症状も生じやすい。

[症候] 驚きやすい，煩躁，不眠。口が苦い。悪心・嘔吐，胸悶，脇脹。頭暈・目眩・耳鳴り。舌質紅苔黄膩，脈弦滑。

【治法】 清熱利胆化痰

【方剤】 黄連温胆湯（『六因条弁』）

黄連・半夏・陳皮・茯苓・枳実・竹筴・甘草

すなわち温胆湯加黄連去生姜。温胆湯は、理気化痰、清胆和胃。二陳湯の理気化痰に、胆熱を清泄する竹筴を配し、黄連で除煩する。あわせて胆経の痰熱を除き、心神を鎮め、脾胃を調える。

6. 肝と胆の病証に用いる薬物

以上に紹介した方剤の組成を理解しやすいように、肝・胆の病証に用いる薬物を作用によって分類して表5に示す。

表5 肝・胆の病証に用いる薬物

作用	薬物
疏肝氣	柴胡 青皮 香附子 川楝子 木香 鬱金 枳実 川芎
瀉肝火	龍胆草 梔子 大黃 黄芩 黄連 青黛
清肝熱	夏枯草 菊花 桑葉 牡丹皮 青蒿 板藍根 蔓荊子
熄肝風	羚羊角 地竜 僵蚕 全蝎 蜈蚣 天麻 鈞藤 防風
鎮潜肝陽	石決明 珍珠母 磁石 龍骨 牡蛎 代赭石
暖肝	肉桂 吳茱萸 烏藥 沉香 茴香
養肝血	当歸 白芍 阿膠 何首烏 鷄血藤 酸棗仁
滋肝陰	枸杞子 黄精 女貞子 熟地黄
補肝氣	黄耆 山茱萸 杜仲 木瓜 菟絲子 桑寄生 續斷
清胆瀉火	茵陳 梔子 青蒿
利胆	茵陳 梔子 鬱金 金錢草

プロフィール

平馬直樹（ひらま・なおき）



●現職

平馬医院院長，日本医科大学東洋医学科講師

●略歴

1978年 東京医科大学卒業

同年 北里研究所付属東洋医学総合研究所医局 入局

1987年 中国中医研究院広安門医院 留学

1990年 牧田総合病院牧田中医クリニック診療部長

1996年 平馬医院副院長，後藤学園入新井クリニック漢方診療部長を兼任

現在，平馬医院院長。2005年より日本医科大学東洋医学科講師

●著書

『図解よくわかる東洋医学』共著（池田書店・2005年）

『中医学の基礎』監修（東洋学術出版社・1995年）